

自己PR文に関する文章指導についての提案

——テキストマイニングを用いた分析から——

小出 祥子

1. はじめに

大学生が書かなければならない文章には様々なものがあるが、就職活動に関わる文章もその一つである。大学の授業で用いられる日本語表現系科目のテキストにも、就職活動に関わる文章の書き方を学ぶための章が含まれていることも多い。例えば、位田絵美（2020）は、社会人に必要とされる日本語を大学生が学ぶためのテキストであるが、その第6章に「インパクトのあるエントリーシート」という単元を設け、エントリーシートに書く自己PR文の書き方が学べるようになっている。野田春美ら（2016）は、アカデミック・ライティングを含めた文章力を身につけるためのテキストであるが、22課に「自分を表現する—自己PR 発展編—」として、就職活動における自己PR文の書き方を扱う単元がある。また小出祥子ら（2023）においても12章に「就職活動における日本語表現」として、「エントリーシート」と「面接・グループディスカッション」における日本語表現を扱う単元を設けている。

以上のように、大学の授業において、就職活動に関わる文章は学ばれている。その中でも特にエントリーシートに書く自己PR文が学ばれることが多い。

では、どのような自己PR文が望ましいとされているのだろうか。例えば位田（2020）には、以下のような記述がある。

「自己PR文」を作成するときに大切なことは、（中略）アピールポイントを裏づける具体的な事例を盛り込むことです。なぜこの個性や資質が自分の長所なのか、その長所はどのような状況で発揮されるのか、具体的なエピソードをあげて説明することで、アピールポイントに説得力が生まれます。

自己PR文には、具体的なエピソードが必要であることが分かる。さらにそれは、自分の個性や資質を説明するようなものでなければならない。また、位田（2020）には次のような記述もある。

また、そのアピールポイントは、「自分は就職後に活躍できる人材である」と訴える内容と関連している必要があります。就職後に、仕事の中で自分の個性や資質をどのように活かすのか、仕事の内容と自分の専門分野や経験がどのように関係しているのかを説明できるアピールポイントにして下さい。

野田ら（2016）にも、以下のような説明がある。

人事採用の主な方法として「コンピテンシー採用」があります。その会社で高い成果を上げている人の思考や行動の特性をパターン化し、それに近い人材を採用するという方法です。

（中略）

就職活動における自己PR文を書く際には、このような採用側の考え方を理解したうえで、自分の人柄や能力が社会のなかで役立つものであることが採用担当者に伝わるように書く必要があります。

（中略）

良い自己PRを書くためには、就職活動の時期までに、何かに全力で打ち込む経験を積んでおくことが望まれます。成功や失敗の経験を糧に自らを成長させておくことが、評価される自己PRを書くうえで必須といえます。

要するに、学生時代の具体的な経験をあげながら、その経験を一般化し、就職後に職場で活躍できると見込まれるように、読み手に説明する文章を書かなければならないということである。以上を踏まえると、望ましい自己PR文には、少なくとも二つの要素があると言えそうである。

- 要素1. 自分の個性や資質を十分に伝えることができる具体的なエピソードが書かれている
- 要素2. 学生時代に自分が力を発揮した経験を一般化し、自分の個性や資質が学生生活だけでなく社会でも役に立つことを説明している

では、このような文章を大学生が書くためには、どのような指導が有効なのだろうか。本稿では、実際に大学生が書いた文章をテキストマイニングによって分析することで、就職活動に関する文章の指導に有効な方法を考えたい。

2. 調査の概要

前述の野田ら（2016）にもある通り、良い自己PR文を書くためには、「成功や失敗の経験を糧に自らを成長させておくこと」が必要とされる。そこで、本稿では、名古屋短期大学現代教養学科で行われている「大学祭への参加」に関する文章を用いることとする。

名古屋短期大学現代教養学科は「現代を創造的に生き抜く英知」を育てることを基本理念とする学科である。その実現のために、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」を重視し、その能力を伸ばし発揮するようなカリキュラムが実施されている。その中の一つが、1年生の必修科目「教養演習Ⅰ」の活動である大学祭への模擬店出店である。経済産業省は「社会人基礎力」について以下のように説明している。

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力

(12の能力要素)から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」(後略)

大学祭への模擬店出店を通じて、試行錯誤しながら周りとは協力し、主体的に動く経験を積むことで、「社会人基礎力」を伸ばすことが期待される。まさに、「成功や失敗の経験を糧に自らを成長させておく」ことができると期待される経験であり、そこで培われた「社会人基礎力」は就職活動においてアピールする力と重なる部分が多い。この力をアピールする文章は、就職活動における自己 PR 文と同じ特徴を持つとみなすことができる。

2.1. 調査対象

本稿の調査対象は、名古屋短期大学現代教養学科1年生が書いた大学祭についてのレポートである。対象の1年生には、大学祭終了後に以下のような内容のレポート課題が課される。

「名桜祭(スポーツ祭典、前夜祭、本祭、後夜祭など)を通して成長したあなたの社会人基礎力について述べなさい」

大学祭(=名桜祭)は、3日間にわたって行われており、1日目がスポーツ祭典、その夜が前夜祭、2日目3日目が本祭、3日目の夜が後夜祭である。ゼミ活動として行われる模擬店出店は、本祭の期間中に行われる。レポートは、模擬店出店だけでなく、スポーツ祭典や前夜祭、後夜祭など、大学祭全体をテーマにしてよいことになっている。

対象とするのは、大学祭に参加し、レポートを提出した学生34名の文章である。なお、学生に対しては、個人情報保護及び倫理的配慮について口頭と書面で説明し、協力の意思を確認している。本研究について同意を得られなかった学生のレポートについては調査対象から除いている。

2.2. 調査対象となる文章の実態

位田(2020)、野田ら(2016)より、望ましい自己 PR 文には、少なくとも二つの要素があるという考えを述べた。

- 要素1. 自分の個性や資質を十分に伝えることができる具体的なエピソードが書かれている
- 要素2. 学生時代に自分が力を発揮した経験を一般化し、自分の個性や資質が学生生活だけでなく社会でも役に立つことを説明している

しかし、調査対象となる文章を見てみると、この2つを満たす文章を書くことはかなり難しいようである。

まず要素1について、経験の切り取り方が分からず、自分の個性や資質を伝えるエピソードを取り出せないという問題がある。以下のような文章が見られる。

1日目は野菜を切る準備や前準備に取り掛かるのが遅く、10時になり始まってから在庫がなくなってしまってお客さんを待たせてしまったり、材料がなくなってしまっ運営自体が出来なくなったりと反省する点が多かった。テントに5人はいなければならないというルールを守らないといけないので、みんな上手く休憩できなかつたり1日テントの中に居なければならない子も出てきてしまったり、役割分担をしたが、大変さや体の疲労の差がポジションによって違い、不満が出てくる子もいた。

以上の文章では、出来事を時系列に沿って具体的に書いてはいるものの、自らの行動に焦点を当てることができておらず、自分の個性や資質を伝えることができていない。

また、以下のような文章も見られる。

大学祭の期間中、テントの設営や解体などの人手が必要なタイミングが多くあった。その際に自ら声かけをして人を集め準備や片付けを時間内に終わらせることが出来た。大学祭の期間中、苦手としていた働きかけ力を使うこのような機会に何度も遭遇した。

この文章は、自分の行動に焦点をあてて書こうとしている様子が見られる。しかし、「集めた人どどのように行動することで、準備や片付けが時間内に終わったのか」というような具体的なエピソードを書くことができておらず、自分の個性や資質を伝えるという効果は薄い。

要素2については、学生時代の自分の経験を、社会で役立つ力に結び付けることが難しいようである。例えば、以下のような文章が見られる。

本番前準備では積極的に動いてくれる子が少なく、大変だったけれど本番では全員で協力して動き、やっぱりみんなで力を合わせた方が達成感も感じれて（ママ）チーム力もあげることが出来るので、大切だと感じた。

学生時代の自分の経験を社会で役立つ力に結び付けるためには、自分の経験の価値を一般化し、「社会に入ってから役につく」ということを説明しなければならない。しかし、上の文章では「大変だった」「達成感を感じる」「大切だと感じた」という感想に終始してしまっている。

また、以下の文章では、具体的なエピソードに結びついた力は述べられているものの、経験を一般化できておらず、社会でどのように役立つかを伝えることができていない。

材料をどれだけ買ってくるべきかを考え、誰がどの材料か分担し、スムーズに対応出来るようテントの中の配置を変えるなど売り上げにつながるよう考えた。そこで課題発見力、計画力が培われた。

それに対して、以下の文章では、表現に直すべき点はあるものの、「時間を有効的に使うことで売上に多く貢献」「目標を達成するための時間の使い方」とあり、大学祭での経験を一般化し

て伝えようとしていることが分かる。

私は今回の大学祭で時間を有効的に使うことで売上に多く貢献したり、次の行動しやすくなったりすることを学び、社会人基礎力の1つである発信力を備えることが出来た。

(中略)

1日目で午前中があまり売れないことがわかったため2日目は午後からの営業にしようとした日のことを考えて話し合いながらできたことが機転をきかせていいと思ったし、時間を無駄にせず、使えていると感じた。

私は個人的にOのスタッフ、Dのステージ、D委員会へのヘルプと忙しかったため、如何に時間にロスを作らずに動けるかが勝負だった。1日目はDが午前中にあったのでテントを立てて準備だけして、練習に向かった。(中略)

大学祭を通して目標を達成するための時間の使い方を体験しながら学ぶと共にみんなが同じ目標を持ち活動することで発信力が磨かれ、様々な形で宣伝しお客さんを増やした。

以上のような学生の文章の傾向から、以下の条件でレポートを分類し、それぞれの文章の特徴を分析する。またこれ以降、それぞれの条件を「行動/具体的」「行動/抽象的」「出来事」「分析○」「分析△」「感想反省」と呼ぶ。

〈要素1についての条件〉

- ・自身の行動について具体的に書くことができている、どのように考え行動する人物なのか、読み手に伝えることができている→「行動/具体的」
- ・自身の行動について書くことはできているが、具体性に欠けており、どのように考え行動する人物なのか分かりにくい→「行動/抽象的」
- ・出来事全体に焦点が当たっており、自身の行動を書くことができていない→「出来事」

〈要素2についての条件〉

- ・経験を一般化して、社会で役立つ力としてアピールできている→「分析○」
- ・経験と成長した力と結びつけられているが、一般化できておらず、社会で役立つかどうかはアピールできていない→「分析△」
- ・経験した感想や反省になっている→「感想反省」

自己PR文としての望ましさの度合いは「行動/具体的」→「行動/抽象的」→「出来事」、「分析○」→「分析△」→「感想反省」の順に高い。

2.3. 調査の方法

本稿の目的は、学生が要素1・要素2を満たす文章を書くための有効な指導方法を考えることである。要素1においては、自分の経験の中からどのようなエピソードを選択するかについての

もなく出現する語であり、「原点」から遠くにある語ほど、強い特徴がある語であると解釈できる。

「呼びかける」「案」「客」「調理」「チラシ」「伝える」などは「行動/具体的」な文章に特徴的に見られることが分かる。それに対して「分担」「実際」「本番」「難しい」などは「出来事」に特徴的な語である。

前者に特徴的な語は、ほとんどが自分の行動に関わるものであり、この結果は自然である。しかし後者の「出来事」には、なぜこれらの語が出現しているのだろうか。実際の使われ方は以下のようなものである。

[分担]

- (1) キャンドル作りや看板作りなどを急いで行いう必要があったがゼミのみなが分担して取り掛かってくれたためスムーズに準備をすることが出来た。
- (2) 呼び込み用の看板など計3つの看板を作成するのに3人で分担して行った。その中で私は、部屋の外に置く看板の作成を担当した。
- (3) しまっていたのですが、2日目は1日目の反省を生かしてみんなで担当を分担し、適度に交代して進めることができました。
- (4) 私は1日目の食料を調達する事しか出来なかったが、他のみんなが協力し分担してくれたおかげで思っていた以上の利益が出た。

「分担」の使用されている用例を見ると、役割を分担したことだけを経験として切り取ったものばかりであり、どのように分担を決めたか等、書き手の考えや行動が現れるエピソードはほとんど見られない。実際には、書き手自身が役割分担を発案したり、分担するにあたって様々な工夫をしたかもしれないが、そちらに焦点が当たっているものは見られなかった。

[本番]

- (5) 2日間で50個売れば費用の元が取れるように値段も設定した。しかし、いざ本番となると少し高い値段で売りたいという理想は通用するものではなかった。
- (6) ゼミの皆と役割分担をして、計画的に進めることができた。本番ではなかなかお客さんは来ず、売れることは難しかった。
- (7) 名桜祭の模擬店の準備や本番を通して、主体性と課題発見力をより伸ばすことができた。
- (8) 申し訳ないことをしたということに気がついたのが名桜祭直前だったため、かなり遅いが、本番は誰よりも働こう、皆の力になろうと決意できた。

「本番」は、(5)(6)のように、予想とは異なり上手くいかなかったという内容と共起する例が見られた。ただし、なぜ上手くいかなかったのか、またそれを解決するためにどのように動いたのかについては述べられておらず、自分の行動には繋がっていない。また、大学祭全体を「本番」という一言でまとめてしまっている例も多い。

[難しい]

- (9) 売上を分け合う点では、それぞれの働き分で分け合う基準が難しいので準備の段階でその話し合いはしておくべきだったと思いました。
- (10) ただ調理するのではなく在庫の個数なども見て調理するのがなかなか難しかった。
- (11) 本番ではなかなかお客さんは来ず、売れることは難しかった。
- (12) 名桜祭で成長することができた。初めての経験で大人数でひとつの事を行うのはやっぱり難しかったし大変だったけれど全員でひとつになって取り組んだ事で自分の成長にも繋がり、

「難しい」の用例は、大学祭での失敗が共起する例が多い。しかし、その難しさの原因は自身の行動ではなく、周りの環境や自身の能力不足として書かれることが多い。また、難しさを克服するために行動を起こしたという内容もほぼなく、書き手の考えや行動のアピールには繋がっていない。

[実際]

- (13) ゼミの子の意見をもとに企画を考えていきました。私やゼミの子で実際に名桜祭に行ったことある子でどんな感じだったのかという話から始まりました。
- (14) 外でお店を出していなかったため、チラシを配ったお客さんが実際に教室に足を運んでくれた時は嬉しかった。
- (15) 今回の名桜祭では実際に模擬店を出すことによって店を出す点での学びや、チームワークについて学ぶことができました。
- (16) そして何円分の材料を用意するべきかが話せていなかった。実際に材料を集めてからある分だけ作ってしまったので少し数を減らしてもよかったなと学んだ。

「実際」の使用されている用例では、(13)や(14)のように、自分以外の行動と共起する例が多く見られた。自分の行動と共起する例についても、行動は具体的に書かれていない。そもそも「実際」とは、考えていたことに対して、現実世界で起こっているものであることを表す表現である。現実経験した大学祭について書くレポートでは、使用しなくても意味の通じる場合も多く、上記の例も「実際」を省略しても成立する。他の語を用いて、より詳しく描写すべき場面に対して、適切な表現を思いつかないために、「実際」という語を使用している可能性もある。

3.2. 要素 1 に関するまとめ

「行動/具体的」「行動/抽象的」「出来事」を外部変数として、文章の内容の傾向を分析した。その結果、自身の行動を書けていない「出来事」に分類されたものには「分担」「実際」「本番」「難しい」という語が特徴的に見られた。

「分担」は模擬店運営の工夫について、使用される表現だった。しかし、なぜ分担したのか、どのように分担したのか、というような書き手の考えや行動は示されなかった。大学一年生にとって今回の大学祭は、教員から指示されない環境で、自分たちだけで必要な役割を考えて分担を行う初めての経験である場合も多い。役割分担を自分たちだけでできたこと自体に満足してお

り、それ以上詳細に書く必要性を理解していない可能性も高い。

「本番」については、大学祭全体をまとめる表現であり、具体的な記述を阻むものである。大学祭のどの場面を述べたいのか、考えるように促す必要がある。また、大学祭での失敗と共起する例も見られたが、その失敗に対する行動等は書かれておらず、自分の力のアピールには繋がっていない。ただし、大学祭中に経験した失敗を克服するような行動をとるには、大学祭の3日間では期間が短かすぎるという問題もある。アピールに繋げるのであれば、大学祭よりも前に経験した失敗体験を活かして、大学祭でどのように自分の行動を改善したのかを書くことのできるような指導が必要だろう。

「難しい」についても、大学祭の失敗と共起する記述が多かった。この点で「本番」と似た傾向を持っており、同様の指導が有効であると考えられる。

「実際」については、必須ではない表現である場合が多いことが分かった。別の用語を用いることで、自身の行動に繋がる記述になる可能性もある。「実際」を別の表現で書くように促すような指導が有効かもしれない。

以上から、要素1について、自分の行動を書けていない文章には、詳細に書くべき出来事一つにまとめて描写するような語や、大学祭の失敗と共起する語が使用されやすいことが分かる。詳細に書く際に用いることのできる具体的な表現を伝えたり、大学祭での失敗を書くだけでなく、それ以前の失敗を大学祭でどのように活かしたのかを書くように指導することが有効であると考えられる。

3.3. 要素2に関する対応分析

次に、外部変数として、要素2についての条件を設定する。「分析○」「分析△」「感想反省」に分類された文章は、それぞれ内容にどのような特徴があるかを確認する。

図3に特徴的なのは、「課題発見力」が突出していることである。「分析○」の文章に特徴的に表れている。それに対して、「感想反省」には「チーム」「話し合い」「協力」「子」、「分析△」には「コミュニケーション」が表れている。

まず、「感想反省」に特徴的な語から観察し、次に、「分析△」「分析○」に特徴的な語について観察する。

[チーム]

- (17) 全員で協力して動き、やっぱりみんなで力を合わせた方が達成感も感じれてチーム力もあげることが出来るので、大切だと感じた。
- (18) 校内だけでなく外部からもたくさんの人が来るもので初めての体験だったので、よりチームのことの連携を取ることの大切さやみんなで協力することの重要性を改めて感じる事が
- (19) 同じく皆と1丸となって入れることができた。対戦する相手には負けてしまったけどチームとして皆と仲が深まったと思った。
- (20) また、他のポジションも臨機応変に対応し、声掛けも積極的に行い、少しでもチームの役に立つ事ができた。自分のこともやりつつ、周りを見ることは難しかったけれど

担」の傾向と共通する。

[話し合い]

- (25) 販売している場所は2人くらいにし、それ以外は呼び込みに回るようにゼミ内で話し合い改善できた。1日目でキャンドルを買ってくださった方の年齢層が家族連れや年配の方……
- (26) てくれるがなかなか買ってくれない時間が続いた。このままだと売れないと思い、皆んなで話し合いをして値段を下げた。2日目もなかなか買ってくれる人が少なく、……
- (27) は材料を準備する時間や片付けの時間なども考えて取り組むことができた。また、全員が話し合いに参加して意見を出し合うことができた。
- (28) いちばん印象的であるのは、本祭での模擬店の出店である。私たちは話し合いの末、焼きそばを売ることに決めた。

自分の行動として話し合ったことは書かれているものの、どのように「話し合い」に参加し、貢献したのかは書かれておらず、解決策として「話し合い」を上げるにとどまっている。この点も3.2の「分担」の傾向と共通する。

[子]

- (29) 模擬店を企画からやるということが初めての試みでした。何もわからない状態からゼミの子の意見をもとに企画を考えていきました。
- (30) 違う学科の子に看板がどんな飲み物か分かりにくいと言われて、確かに周りとは違って想像しにくいと……
- (31) 皆が納得するような案を考え、出し合う事が出来た。最後にゼミの子とこれまで以上にコミュニケーションを取る事を意識して頑張った。
- (32) 守らないといけないので、みんな上手く休憩できなかつたり1日テントの中に居なければならぬ子も出てきてしまったり、役割分担をしたが、大変さや体の疲労の差が

「子」の用例には、自分以外の人物の行動が共起している例が多い。また「子」と書き手とが関係する用例では案を出し合うなどの例が見られ、共起する表現の意味的な傾向は「話し合い」「協力」と似ている。

[コミュニケーション]

- (33) 今まで関わりを持っていなかった他企画の委員や学生とコミュニケーションをとり円滑に行事を進める手助けをした。大学祭実行委員会全体の人数が少なく、……
- (34) 最後にゼミの子とこれまで以上にコミュニケーションを取る事を意識して頑張った。今までは特定の子達としか話さなかったけれど、……
- (35) それは、思っている事を上手く相手に伝えるが出来ない事だ。ゼミの皆とコミュニケーションを取る工夫はしていても伝えたい事を相手の気持ちも考えつつ私の思いも伝える……

- (36) 今回勇気を出して話すことが出来ました。自分の中で少しだけですが、コミュニケーション能力が上がったと思いますので、これをこれから就職をするうえで役立てていきたい……

「コミュニケーション」の使用される例は、自分の能力について書かれたものがほとんどである。自身の経験を分析して能力について記述しているといえる。しかし、自分自身の考えや行動に関わる、どのようにコミュニケーションをとったのかについては記述されていない。社会で役立つ力として一般化もされておらず、分析としては不十分である。

コミュニケーションの内容には「チーム」「協力」「話し合い」の経験に関わることが多い。自分がどのように行動したかについて説明されていないため、十分な分析が難しく、一般化することができないのだと思われる。

以上の例に対して「分析○」に特徴づけられる語は「課題発見力」である。

[課題発見力]

- (37) 次の模擬店に備えて材料をどれだけ購入するのか考える。この力は社会人基礎力という「課題発見力」である。課題発見力とは、現状を分析し、目的や課題を明らかにする力である。
- (38) そして、売り上げも伸びた。このことから、私は、自分たちにとっての課題を見つけ解決する課題発見力を成長させることができたと考えた。2つ目は、状況課題発見力だ。私たちの
- (39) 模擬店をやるなら、体が暖かい商品にしようと考えた。今回の名桜祭を通して、私は課題発見力と状況課題発見力を成長させることができ、ゼミのみなど力を合わせて、模擬店を成功
- (40) 分担し、スムーズに対応出来るようテントの中の配置を変えるなど売り上げにつながるよう考えた。そこで課題発見力、計画力が培われた。

今までの例と異なり、「次の模擬店に備えて材料をどれだけ購入するのか考える」「体が暖かい商品にしようと考えた」など、実際に書き手が考えた内容が共起している。さらに(37)のように「課題発見力とは、現状を分析し、目的や課題を明らかにする力である。」と能力を自分の言葉でも説明している例も見られる。

3.4. 要素2に関するまとめ

「分析○」「分析△」「感想反省」を外部変数として、文章の内容の傾向を見た。その結果、「感想反省」に分類された文章には「チーム」「話し合い」「協力」「子」について書かれているものが多く、「分析△」には「コミュニケーション」について書かれているものが多いことが分かった。

これらに共通するのは、人間関係が関係する文章であるということである。この特徴は、要素1の「分担」にも共通する。「チーム」「話し合い」「協力」「コミュニケーション」等は、もちろん社会に出てから必要とされる力に必須の要素であり、これらをアピールすることに問題は無い。しかし、これらをテーマとして、自分の力を文章で表現することは、大学1年生にとって難しいのではないだろうか。

そもそも人間関係の中で自分がどのように行動するかを正確に説明するためには、自分以外の

人物についての理解や、自分の行動が集団に与えた影響の説明等も必要となる。それを分かりやすく文章にするためには、経験をしているときから、周りをよく観察し、状況を正確に把握しておく必要があるだろう。おそらく、このような振る舞いは、大学1年生には難しいのではないだろうか。そのため、感想に終始してしまったり、分析をせずに「話し合い」「協力」という語で、事態をまとめてしまったりすると考えられる。またコミュニケーションは、相手の性質によって大きく変化する。現在周りにいる人間と、社会に出たときに周りにいる人間とは異なっているため、まだ社会を経験していない大学一年生にとって、一般化は困難であると考えられる。そのために「コミュニケーション」をテーマとして選んだ文章では、自分の行動に対する十分な分析が行われず、一般化して社会で役立つ力としてアピールすることが難しかったのだと思われる。

それに対して、自分の経験を一般化し、社会で役立つ力としてアピールできている文章には「課題発見力」をアピールするものが多かった。この力は特に誰かとの協力を必要とせず、自分の行動だけで完結することもできるものであるため、説明も比較的しやすい。また、「課題」はどのような社会にも存在することは想定しやすい。このような特徴から、「課題発見力」は自分の経験を一般化し、社会で役立つ力として文章にしやすい力だったのだと考えられる。

4. まとめと今後の課題

改善が必要なレポートには、以下の特徴が見られることが明らかになった。

- ・人間関係に関わる表現「分担」「チーム」「話し合い」「協力」「コミュニケーション」等が使用されており、詳細に書くべき出来事をそれらの表現で一つにまとめて描写している
- ・大学祭の失敗と共起する語が用いられている

前者については、それぞれを詳細に書くための具体的な表現を指導することが有効であると考えられる。例えば、福山清蔵ら（2011）には、グループワークの振り返り用紙に、以下の役割をした人をあげる欄がある。

- ①司会者の役割をした人
- ②メンバーの緊張をほぐした人
- ③話し合いで行き詰まったときに良い提案をした人
- ④混乱したときに方向を整理した人
- ⑤話し合いから外れた人を話し合いに引き入れた人
- ⑥時間の進行に気をつけていた人
- ⑦決定をとりまとめた人

以上のような、具体的な役割を表す表現を示すことで、自らが人間関係の中でどのような行動をするのかについての分析を助けることができると思われる。

後者については、大学祭の失敗を記述することも大切な振り返りであるが、自己PRという点からは、大学祭以前の失敗を、大学祭でどのように活かしたかという視点で振り返るような指導が必要であろう。

今回は、大学祭をテーマにした場合の自己PR文について、具体的な指導法を提案した。他の

出来事をテーマにした場合には、文章の様相が異なることも予想される。今後、他をテーマにした文章についても分析を行いたい。

参考文献

- 福山清蔵・小澤潤子・片岡彩・加藤尚子・加藤博仁・木内理恵・小島美枝子・高谷公之・松森大
(2011)『対人援助のためのグループワーク』誠信書房
- 岸江信介・田畑智司 (2014)『テキストマイニングによる言語研究』ひつじ書房
- 野田春美・岡村裕美・米田真理子・辻野あらと・藤本真理子・稲葉小由紀 (2016)『グループワーク
で日本語表現力アップ』ひつじ書房
- 位田絵美 (2020)『ビジネスシーンに学ぶ日本語』学術図書出版社
- 李在鎬 (2021)『データ科学×日本語教育』ひつじ書房
- 樋口耕一・中村康則・周景龍 (2022)『KH Coder OFFICIAL BOOK II 動かして学ぶ！初めてのテキ
ストマイニングフリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析』ナカニシヤ
出版
- 小出祥子・浅岡悦子・川村祐人・鬼頭祐太・松浦照子 (2023)『実践 日本語表現—伝わる日本語を
身につける—』学術図書出版社

(受理日 2024年1月5日)